



溫故日録

四



温故目錄卷第六

水無月

林鐘 鐘或作鐘六月律あり金言抄に嫌詞より
そり但しや一水師の訓所出味タ詳

氷室

主水司四月一日より九月盡まて是を奠
六月一日と肝要之用也延喜玉

水司式曰凡供御水者起四月朔日盡九月晦日
其四九月日別一駄以八顆為駄五八月二駄四顆六
七月三駄又曰凡供中宮水者五八月日四顆六七月
六顆今案六七月乃あつて河ハ加増して主水司よ
り是をもちて花鳥餘情
又木ニ為相哥

温故目錄

中らえたるきつり多ひのこりてはたふよ公存まて
題ハ四月一日奏氷水とつり公事根源之昔仁徳天皇
の御宇六十二年五月日額田大中彦皇子鬪鶏
野と云取ま狩りしに出給て山より野中をえん
り給しる菴を仰りたる様ある所を一人とけりし
見せ給ふ巖也とて其時かの山にありし人
りしてとくせ給ふ氷室なりとて皇子の
その氷とけし様うてかきつるある答て云出
一丈あり堀てくさばそのふ小窟て茅萱
たし厚取敷てくさりとをきぬるふ氷ていやく
ある大澤にももけり是と取て熱月よりわなる
とらん其時皇子は氷と仁徳此聖乃御門奉せ
給ききハたのめりぬる穀感とて由てまて文な
しとのせり是取とせり始其後季冬とも是
おとて固く不と氷室と置まけり也

堀川百首の氷室此哥云仲實

此をれ母ふたのちうおさめたる氷室と今もたせりたる
氷室乃在泉ハ清輔初学抄をふんたり夫木ニ中勢親王
いみけけをけりたりそれらや氷室は清膳たるりりん

し、雪も夏也
氷膳物 熱月なれハ清膳よ氷
と用らばひのおれとて

堀河百首氷室、哥、後頼

皇れこもれまれとせひハきつる氷室よおりのありある
すてきれ代の水は清膳とふりりしをわひとれりる
夫木ニ少内侍哥也同集ニ為總心哥云

氷水 涼氏常夏れ巻も氷水の事たり細流云
ひや 成る也流双流よ云いりあつて晝也

いふるのさ成らんを属れ用ゆる
水よあを

杜子表納涼詩

公子調氷水
佳人雪藕絲

醴酒 朔日 一取さけはきふけきハよとと供する

一取さけとらる竹葉の酒なれ一取さけとらる
こまけとも式の文よ作り昔ハ口中よ未と嚼て宿さ
く酒よ作るやこの酒ハ造酒司きふらり七月廿

日申て日毎はまもろかり應神 天皇の御時より
く一取さけを酒に化らす事もけ時よ百詠の
人わらりてけけけけけけけけけけけけけけけけけ

く物おとと人ゆきと神代は素盞鳥尊箱田姫
くくくは大蛇とくくくくくくくくくくくくくくくくく

公事根源 但御物忌不供

年中行事 哥合

解次祭 十一日 是ハ先神今食以前上り神祇官れ

北門より東の掖よ着て供神物具否とら
ぬ次よ聽はれさて事を終ぬ神祇官禱詞

り禊師祝乃座よけく本官人とる木綿とけ
るり上り壇下此薦座よとけく清巫幣物

公事根源 年中行事 哥合
夏はき奉れとりの月よのかりゆりれこの幣帛

祇園會 七月十四日兩日 此祭ハ禁中ハこと

事ハ長たくりけけけけけけけけけけけけけけけけけ

神皇正統記卷之六 神武天皇二十一年 託宣の事
ありて山城國の山崎にありて

此童部 牛頭天神共武塔天神とも言ふ也
昔武塔天神南海の女を娶ひて

日暮し路に宿をかり給ふ所のすゝか
民將來巨且將來と云二人のあり兄弟は

兄弟はまゝにありて才と名ありて天神也
才の將來の御孫はゆづりて兄弟は蘇我

と名する其後八年と云武塔天神八子の御
子を引りてかれ兄の蘇我家にありて一夜の

宿をとりて事を荒と為りて恩を拂ふとて蘇我
茅渟を給ひてとのまゝの夜より疫癘天下

ありて人死す事繁と云其の時蘇我
武塔天神我の速須佐之命神を

のたまふ今日より疫癘病天下におそむん時
將來此子孫也といひて茅渟を給ひ此災難を

免はんとすまじき事や又祇園の縁起のせて
いふ天神は北の國あり九種と云其國の

中御園の吉祥といふ其國の中城あり城
は王あり牛頭天神と云又武塔天神とも云

娑喝羅龍王の女を娶ひて八王子と云其
八万四千六百五十四神の眷屬ありといふ御

靈會れ時四條京極にて粟代御飯と云蘇我
蘇我將來れ由緒と云此公事根源

かたきすやまら此等の事は其のときき
史本ニ祇園民部
心為家此事

祇園臨時祭

十五日御禊まゝの儀大さへ平野

天治元年六月よりゆる又き小走馬勅樂

天延三年此東遊の奇よい

神代乃八坂此今日よりそ馬千々年ハかき

八坂此里とこいれ祇園也山城國愛宕郡八坂郷

とよふよ神社とゆれらる公事根源

暑日

石踏茂暑川原

夏行歩也 藻塩

夕立

夕立暮此字二句嫌新式立の字と小二句嫌也夕よ五句嫌 無言抄 夕時分小二句

新式抄

武抄云 白雨と書本ハ山谷が詩よりありて

正字もれ夕立字立の字よ二句可嫌義なり新式

其沙汰る夕立此字よも五句可去也云云不用

立此字よハ二句よ嫌まき

ハ今まきありても詮なり

夕立此事ゆり夕立不可有降物ハ打越可嫌

秋夕の字立此字共よ式よ可嫌之暮此字一と

夕時分よも五句可嫌夕よつれり清也夕よ風も

これあり無言抄 朝時分よ二句嫌新式抄物よ

も夕立所まきあり物よ打越嫌とあれハ依向祈夏

よなまきまきかき去嫌の事まきもまきハ夕よ

まきまきして夏まきとまきまきかくのまき

まきハまきかこれあるれ之 風雅夏哥為兼

松原ハ風ハまきまきまきまきハ夕よまきまき

夕立 稲妻とまきまきも夏也夕立 小蝸と

ふじまきまきまき夏の奇よまき

ても夏まきまき無言抄よあり一説ハ秋也案す

立ハ七月初ころの事也す中比中とて新式抄を

多ク尾花などふよと合さる哥もゆかり万葉集第十

夕立此^{興ら}あつこといふは^{興未}尾花^{興未}と此^{興未}白鳥おとあ

又堀河次郎百首ハ夕立と秋の題よらゆり

蝸ハ二十一代集ハ夏此哥此部よもあつこととて

丈木なるとも蝸と夏の題よらゆり仍ハ此^{興未}と此^{興未}

きこと定びたさよと其義其義哥乃部立ハ撰者の

種く習ひあつ事とつり連哥ハ是と用事

つり又用ひし事もあつ也但二十一代ハ夕立

の哥秋よとて其ハ無言抄の説を其ま可^{興未}用之

次云新古今夏部よ

夕立ハ本や庵の集れんよとてゆりゆりゆりゆり

すなり

節

此日節折代命婦竹とりて参り

ちてらてて抄りてと此法とる果て宮よと

度あり二度をてと祿と折ぬ節抄と此法とる

とて抄りて此法とらて其程よ折あつこと

公事根源儀式ハ事おつたハ略記之雲圖

抄ハ圖あると年中行事哥合注云是神代

とてあり神賑乃んてゆり千五百番哥合土御

これ月れきよとて行つこととて考ふとて此法ハ

十二月二度あり年中行事哥合よ冬此年

新名く竹代葉用いあつこととて此神は

御

秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘

萬葉よ和籙秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘秘

也夏秋交代之時候也而夏火秋金火与金相起

故越夏之名、攘相剋之對、故云名越之稜也。八雲御抄云、邪神とつひをこしむ稜、史よなきといふ。河邊より一とて麻此紫をこしむすをら夕又夜す事也後撰。

かもしめたるをこしむては月とゆきもえんや。題ハみさ月とくしは河原よりいへ月乃ありたとそといふとこ六月後毎日也也。月何とらぬ一云定家卿此注云。月之由人疑之。古人六月之比。必出川原臨。及、絲竹之遊。及、詩歌之興。區例也。不限。稱皆月。長元比。或人記。御倉小舍人來可參。皆月。稜之由催之件。六月十三日也。藻塩草云。月ハ月也中あら

朱雀門はあつまりて稜とゆき六月十二日。天武天皇此御時よりほまる解除ハ觸穢。この時より神事と終時ハ臨時とも常よあき。この大稜ハ百官一同はあつまりて稜とす。

拾遺 後拾遺 比哥と詠す。日大稜此祝詞とす。中聖稜とす。月は国月あり。六月は東鑑より麻の紫。

とさうしてぬきしうすすの麻城もくささ

ふり年中の事并合よ

夏引れあさの大ぬきさうすも此ははた後源の

官川より紙や山田れうへ草 宗初

新輪 是牛頭天皇蘇民將來の教へり遺法

也疫病もやらん時蘇民將來の子孫也といひ

て茅此端とくけはけ災難とらうもんとのあつるゆ

ゝ今も枝は茅此輪と越れ也

新千載入道前太政大臣哥也支木為家

河津川をらんれりあつるもあつるもあつるもあつるも

年毎もるるちのれりあつるもあつるもあつるもあつるも

形代 人形也枝するふ人形とけりて身此災難と

とくく川はあつる事あり是は後源の

河津川より後源の事あり是は後源の

拾遺恩草上定家乃年也源氏東屋よ

ふ一人のりさうあつるもあつるもあつるもあつるも

見たり川もあつるもあつるもあつるもあつるも

千五百番并合よ小竹後并也けあ支木よあつる事

あり大系千句よし那きとをり捨る草此原と云

はくこの末はけりかろる 紹巴句也

小蠅成神 豊葦原中國柱彼國よ螢火此かやく神及蠅聲

飛鬼かりとつり假令夏の蚊のごとく乱る悪神

のる也是とらうすて六月枝ハす也云

衆蚊成雷とらひり事也さうハちいさるえん支木

権僧正云朝哥云

河社

奥儀抄云... 河社... 是ハ夏神樂也... 神樂ハ冬す... 川乃乃... 神供...

猶神中抄... 神樂非夜分... 師説... 陶淵明四時詩云春水...

雲峯

秋彤揚明輝... 秀孤松... 古文前集...

六月照日... 白雲... 峯... 水... 詩...

薰風

六月... 薰風自南來... 古文前集... 南風之詩... 註云南風之薰今...

涼

涼... 詞... 月... 露... 網代... 鷺鴨... 詞...

泉 泉殿も夏也 流布

清水掬 清水剛也 夏也 流布

沈良之井 堀河院百首 後頼 泉哥 定家之水名 納涼と云題よりある哥

又紀伊國は曝井と云名 亦もあるを此の古文直書

雜也 哥ハ萬葉第ナ又木木ヨリ

扇 玉篇ニ 作翫 諭月 季

簾 鐵篋焉席 暑月鋪之 順修名 床上卷收 青竹簾

汗 立言抄ハ夏此部ハ出セラズ 或説ハ常ヨリ人ハこれを汗と云ハナシ

連哥ハハサヤリ 差別ヨリぬシ 只納涼ノ心ハ用テ 夏ナリ 昌程ハモ相尋也

來奴秋 待秋

秋隣 秋近 秋遠 秋を記こいふ也 同心トシ 其也

夏泉 夏也 顯註 密劫 萬葉

懼 六三三 常夏ニナリ 但冬ニナリ 後撰集 第

冬ハ未トナリ 八雲御抄 但冬ニナリ 後撰集 第 十四云 源

しつこく竹をれと
冬かれとまの地がふさねぬ色いひそまわひりから
春いふとと又拾遺愚草上冬哥は定家
花さゆらたれあのを枯よ一花にけるをゆかたて
石竹 萬葉よ石竹の二字紙やま
かてしこ又只るてしこも点ちり

夕顔

植物也 新式 花とかくてし夏
瓢花

木茅

木茅 廿六 俊頼
ひさし花さけるやうにまにまをさうさるれんばらうくちり

瓜

瓜 瓜の皮は青くして白くして
瓜の皮は青くして白くして

麻

櫻 花は梅より似ても顯明なさらうあささけ麻乃
花は梅より似ても顯明なさらうあささけ麻乃

あさけはゆくとそれと櫻麻のハ云綺語抄云さうあささけ
あさけはゆくとそれと櫻麻のハ云綺語抄云さうあささけ

以上袖中抄 不載異説 取要記云
以上袖中抄 不載異説 取要記云

手巻草

葛れうしたものでやまにすくさくさくハハハ
抄六月也 藻塩草 或説四月にけり 奥儀

射子

一名ハ鳥扇 本草 西行家集
射子 一名ハ鳥扇 本草 西行家集

藍刈

あわともりし
藍刈 夏也花は秋也
藍干 衣笠内大臣哥云

むらゆらる餅麩此里よわとあはれうさひのちよあへ
むらゆらる餅麩此里よわとあはれうさひのちよあへ

蓮

蓮 一系

海松

らんろめと、しれかてひくも夏し 流布 土伊日記 貫之
おやうのれやふ六子日あまおのうらうらう強ふひうらう

是はえんも也六帖も下るも松とて我のひくへりきれこあり
涼気 漂遷

は哥ハ細流云海邊乃松かてふくはれあやめいふふら
變代枕詞也あやめハ菖蒲よ「せりりま云

ひかおゆくらめり并らうとねえんははく

菱花

ひとこくも夏也實ハ秋
あさうせしうらめさしふらうらうてひの浮遊は怪め

此哥なく千載集も夏乃部よ入し又
まふかふ菱こくらり夏代題よあざり

澤泻

ことくも夏也一つ是も尋其義と乃之丈木才
ハ夏哥寂也

定家

おりらや下紫よゆれ杜若花よまひてあさるあう流布
是ハ風雅集も春代部よいまり哥よハ杜若花表の

題よこまう也すくかやれ證哥こと乃あふ小
て其季よ定ひふいあれ證哥よふ及也

四季准之而別用哥ハゆありて載定

蟬

一時雨 蟬詞也 流布 声
時雨よ似て

人取虫

世格よハ玉虫れ火成りてこらうん虫よあらんこ
しららみくこく灯よ入る方とくあをいり

顯註 寄勸 拾玉集 第一

腐草為螢

月念も六月也 但和哥よハ六月よかき
六月のふ草朽よそり我若ハ草を團よ螢といひ

六月のふ草れ庵ハははこく雲とあうらう

まゝのうらつと二首より小堀河百首の集りくらぬおの
ひらりかきしとありよ。老草はけわぬ草とありとて
いけよよゆをけり集りんと去むよ。
ひさじもふたふた行てふもあし集引じもひー人びつ
よゆきは其より走ハ行て雲死らんとせしとて

練雲菴

初めハ經緒代事也定家三百首此注よとあり
つてハ經緒代事也定家三百首此注よとあり

鷓鴣鷹

六月のまら、ゆらぬ雲菴を時すすふも口餌あま
ひむりよあをせすて思すありとてさる小暑の志と
あうりて其後けふと暑よハ鷹鳥れわあてこかり同

温故日録 卷第七

御謝山狩總屋作

三枕山祭

廿七日をりみさ山狩とこの時乃事なりや
ゆるなとてい祭りけらかり屋乃事なり

流布

總屋作

信濃御謝山乃まはりよハ薄
とてかこころ代けら其外人れ屋とて祭乃
程は皆すしと乃總とつと也云云玉葉集ニ金判

盛久哥

尾花少ややれ免らる一ひり志り里あるお記のこと
丈木ニ為相哥云

丁あうちやれおれはびくかたあひは林のさる一記

初嵐

秋也初
風ハ雜也

楸

こころりも秋也 新式
秋也 流布 初秋は困也 新式抄

万葉集

十一小

はるより見ゆるこころは濱久本久くかりぬ意ふおらうて
こころ今葉云は哥拾遺第十四も濱いさだこあら
下白鳥あはらんでこ入あり伊勢物語は濱いさ
とあると又下のちあふあひこてこ入あり八雲御抄
はひさここ云非説なり云云濱母ある楸かり濱萩
かり云々こころは物語してひさここいつる所は惟清抄
云濱いさこころ愚見抄は濱はある家と云べし昔
鹿板鹿たて云々こころ定家卿庭上冬菊と
云題

新式抄の南の海のとゆびさく久くある秋れさくさく
は哥の濱代家の心あり孫は題乃庭の文字落題は
かろ也云云師説ははるより砂のたてのうげのさく

がひさのこころかり濱鹿こころかり御疑抄云定家
の哥ははるより本哥とせり又は物語のともゆびさ
と濱いさだこころなかりあはらんでこ入ありて共は本
哥もさくさくさくさくあひさくさくあひさくさくさく
今葉云濱いさこころ愚見抄は二説ありといつる一説は
濱いさ砂の塩はひされさくさくあはらんでこ入あり
ひされさくさく高き砂のたてさくさくさくさく家は
鹿のこころなれは濱鹿こころは又一説は昔鹿板鹿と
云やれ海郎の家居の濱は見ゆるとこころかり拾遺
はまよりて新宮三首は哥の中は庭上冬菊こころ
題はさくさくさくさくは如惟清抄こころは物語は哥は
本哥とせしはさくさくは鹿の事とさくさくさくさくは
説人の好むさくさくさくさく宗祇の注は定家の

平あまは家北家と用也一とつてはひとのわらわの
漢此は定家也漢ははる家居の事とあせり
まらりとせむ祇禪とこればひをたれ汗乃砂の
論ハ今小用いさふとや藤原基輔

新古今

これとてはゆたの哥よりいふとまきりやあま

新式云漢感有説依句可強打越物所母かいつ

金言折云はれりまきりまあめひさし母ひさし

可もて漢は河も小家とていふをり白ふりて一然

者居取母打越嫌ゆり但句れまきりて母よりてる

可媛とて一説有定家卿の哥霜をうぬ南乃

海のもゆいさしといふ哥よりいふり居所はふり也

と武抄物はいり云云新式増抄云大略居所はる

なり但るゆれ洲乃下崩て山守のりまきり

へハ折越なりとて漢はあまはさしハスガ也然同依句

と也或抄云もは居取母打越と嫌今ハ五句也六五

楸の事ハさそをれりなま事とあまさんハかの

傍題とるんれあまひまきりご以次はあま

ちるも秋の秋まらるれ也師説惣一

てらるも秋の秋まらるれ也師説惣一

はるも秋の秋まらるれ也師説惣一

可といひしわらわ

諸木よりとる

とらるるるる

花如蒸栗也萬葉集二如

倍楚なりと本と本文未詳

是ハ曉ひきて朝日と志はる萬葉朝景

書つて葉とハ別也葉ハ真韻云木槿也

表集

柞

櫨

女郎花

牽牛花

己禮文韻曰朝華也又字書曰槿者華也毛詩在
 女同車其顏如舜花愚謂舜朝榮夕衰花也故
 毛詩傳訓呼舜曰朝顏亦不妨也由是日本俗
 以爲去槿盡共牽牛花蓋以傳訓共同是大
 誤也彩人詩曰槿花箇下點秋事早宜牽牛
 牛上竹末以此詩意見則槿華去牽牛各
 別也牽牛花此出於田舎人取之牽牛易
 藥故以名之又或故人詩曰君子若樹性春濃
 秋更繁小人槿花朝在夕不在云

露草

月草也或曰此花八秋五月の中八日とんさるころ之
 云云袖中抄第三云月草ハ六月七月かると云
 云云或ハ八月ハ景物に入らぬと云
 袖中抄説と云
 七月の部と云

鶏冠早花

男郎花

奈と云草此事と云袖中抄ハおぼしむらと云は
 以て花のちるきこれおぼしむらと云は方葉才也家持
 秋の母ふ今し也ゆめそのふれむと云は花あひ見え

桔梗

古今拾遺をた物名よ
 けいけい物の名れ外見

萩

字亦作藎 瀆
 妹也 流布
 萩ハ淡萩ハ蘆の
 幸ふれハ雜也穂乃字色
 修名 三月より云
 萩と云ハ勿論秋也又萩といふ名よすて秋也 師説

芭蕉

霜をくくくくくくく秋
 也 流布 他推之

水け草

秋也 天河ハおろしきりあ説るりハ水影
 草一ハ水懸草也是ハ稻ちり云云方葉才人
 天漢水影草金風靡見者時來之よきり後在令秋上
 顯昭云水け草と云ハ名のけりおろし草と云

松虫 一ノ声 義貞

鈴虫 松虫 鈴虫 絡繹 まきりて

蝥 蝥 詩八卷曰七月在野八月在宇九月在戸十月

蟋蟀 入我牀下 宇ハありがれの落於邊と云又順
倭名ニ宇ハ門ノ屏ノ之間也云云寒も多ハ十月
床比邊へ來て啼也温なる間ハ野ニ居と也

綴 綴 救 虫

促織 蟠織 虫 鳴聲 如急織機 故以テ名之 順倭名

蟋蟀 此非同物 其形似て声ハうねり 蟋蟀ハはくはく也

蟻 虫

藻 住 虫 音 鳴 聲 我蛻云云 虫ハ藻ヨリつゝ小貝也 水邊ニ

蓑 虫 音 鳴 聲 虫トハハハ 雜チリ 流布

